

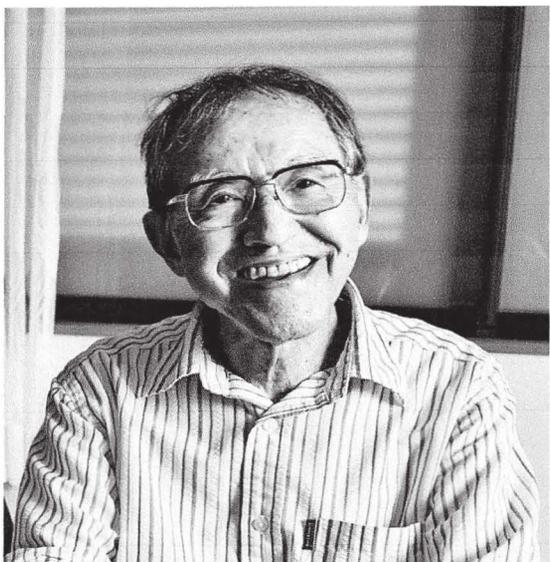
## 「関西からの報告」

二七回生 林 裕 三

### 一、小川東吾先生を訪ねて

昨年の秋本会 会員の某君からの託があつて 千二小学校、一中の先生をしておられ、現在伊勢におられる小川東吾先生のお宅を訪ねた。奥さんを二十年前に亡くされその間、お独りである。ヘルパーさんが週1回来られるそうだが、それにしても お食事も毎日三食きちつと食べておられる。業者に任されていると思うが、お庭もきれいに剪定しておられる。87歳にも拘らずしつかりしておられる。煎茶の心得があるのかお尋ねしたことはないが、いつ行つても美味しいお茶を入れてくださる。私は80歳を超えてもきちんとしている自信がない。いつ起きても自由、どんな服装、例えばバジヤマで家の中をうろろしていても、勝手なので

ある。そのところを先生にお尋ねした。教師と言ふ職業をしていた以上、それは出来ないと言ふことであつた。生徒の目があるからだと言へばそうかも知れないが、先生曰く、生徒やそのご家族が支えてくれている見守つてくれているからだ。「そうでしょう。現役の時、生徒に人のあるべき姿を話していたのに、引退したら、『そんなこと言つていた?』と言ふ訳にはいかないのだ。」と仰る。先の庭木の剪定も 端正であつて欲しいし、雑草が茂る庭では感心しませんね。キチツとしたいとおっしゃる。リビングや玄関には 写真や絵画が飾つてあるが、それぞれが場所を得たように生き生きしているように思う。生徒さんがよく訪ねて来てくれ、話に花の咲く楽しい時を過ごされるそう。そう、教え子のお子さんがガラス屋さんになり、東吾先生に二重サッシを勧めた。東吾先生は省エネのため購入されたのであるが、庭が見える窓だけはそれにしないでほしいと注文された。と言うのは二重ガラスであると若干自然の色でなくなると言うことらしい。先生はそこまで生活を楽しんでおられる。そのガラス屋さんも「東吾先生の生活を楽しむ余裕が羨ましい」と言つておられたようだ。確かに先生のお庭から 神宮の



神路山に続く鼓ヶ岳が借景としても美しく見られる。

先生は スカイプを使ってフィリッピン、台湾、香港の生徒さんに英語や日本語を教えておられている。

もちろんボランティアである。現在はお二人らしいが、一人の方近くの松阪の中国人にも教えておられる。この方はお礼の気持ちもあつてかお子さん同伴で来られ庭の草取りをされたり、菜園を耕したり、何かと手助けをしてくださるそう。パソコンを駆使され、スカイプをされ、また写真などをトリミングなど編集されたりもされているのだ。

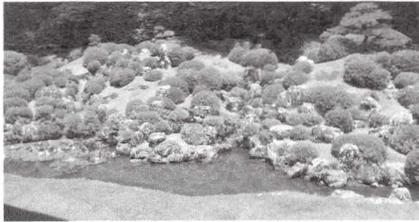
今何に取り組んでおられるかとお尋ねすると 奥さんを亡くされ、落ち込んでいた頃は「永井荷風の『断腸亭日常（荷風が住んでいた新宿区余丁町の家を彼が腸を患っていたこともあつてそう名づけ、日乗は日記のこと、1917(大正6)年9月17日〜死の前日1969(昭和34)年4月29日まで続いた)』を読んでおられ、難解な漢字が多く、辞書なしでは読めませんでした。格調高い硬派を思わせる鋭い評論に心を奪われ、独居しながらあれ程の作品を書かれた荷風に心をうたれました。最近では外山滋比古の随筆を読んでいる時、「浜までは海女も養着る 時雨かな」と言う句に出会い、余生を生きる指針を示唆された。」と話された。

この句は 江戸時代の俳人の滝 瓢水の句で禅僧が瓢水を訪ねて来たときに 風邪気味だったので葉を貰

いに行つたことを禅僧に非難されたことに どうせ海女だから濡れるのだけれど 頂いた命を大切に、せめて浜まで体を労わろう」と言う句「浜までは海女も養着る 時雨かな」を禅僧に託け、禅僧も反省したと言ふことらしい。しかし先生は「どうせ○○だからでは」なくて、「せめて命のある限り」挑戦していこうとされているのだと感じた。

先生のお話の中に「何回も千二小で本当に随分お世話になりました。今あるのは千二小・一中で教職に就いたからだと思つています。校区の子供たちや親御さん周りの先生に感謝しきれない。」と仰る。それに時々「私は15歳の時なくなつて居るのです。兄と二人で小舟で港にむかつていた時、突風に煽られ波切（現志摩市大王町波切）の沖に流されたのです。偶然に異変を感じた漁師さんに助けて頂いたのです。」助けて頂いた人々に対しても「精一杯生きなければならぬ」と仰る。先の「浜までは海女も養着る 時雨かな」の滝 瓢水の句に通ずると思えてならない。

先生宅を辞去する時は「きちつとしなければならぬ」と反省することばかりである。先生 何時までもお元気で。



が決壊し、ここから海水が浸入し汽水湖になった。「今切れた」からここに今切渡しが出来、今切関所が出来た。渡しは危険だったので、お姫様など女性は東海道ではなく脇街道つまり奥浜名の姫街道を通るようになり、江戸時代になって宿場町としても 気賀が栄えた。井伊家が気賀を支配し 浜名湖が海にも通じることもあり、大坂や江戸とも交易が出来、漁業も盛んになりますます栄えたのである。

ドラマ館は相変わらず人が多く、余り楽しむことが出来なかつたので、簡単に済ませ、井伊谷の井伊家の菩提寺龍潭寺に行く。写真のようにお庭は素晴らしい。お庭を楽しんだ後、本堂の裏に井伊家の直虎、直政が祀られている墓所を見る。正面右側に初代共保左側に直虎の実父直盛の墓が新しい。その左側に5つの古い少し小さな墓が並んでいる。右から直盛夫人直虎の実母祐

## 二 NHK大河ドラマ「直虎」のふるさとを訪ねて！

元会社の同期の連中と蒲郡へ行く機会があつたので、直虎のふるさと 井伊谷と気賀を訪問した。私はここ数年大河ドラマのふるさとを訪ねるようにしている。「八重桜」では会津へ。「花もゆ」では松陰のふるさと萩へ、「真田丸」では真田昌幸・信繁（幸村）親子が幽閉された高野山の宿坊で宿泊した。やはり訪問するとドラマの理解が早くなるし、楽しさも増える。

温泉旅館を後にして、大河ドラマを全体的に理解するために、ドラマ館を訪ねるが、人が多くその前に近くにある気賀関所を訪ねた。これはふるさと創生事業（平成元年）により、再現した建物である。当時の関所の雰囲気を楽しめる。本当の関所跡は姫街道の入り口近くの気賀四ツ角に切妻破風の屋根が現在民家の屋根として残っているだけである。

少し気賀と言うか奥浜名湖について説明したい。そもそも、浜名湖は淡水湖であつた。琵琶湖は近津淡海（ちかつあわうみ）、浜名湖は遠津淡海（とおつあわうみ）と呼ばれていたようだ。これが国名の遠江（とおとみ）の語源になった。1998年の明応地震により、砂州

椿尼の墓、直虎の墓、直親の墓、直親夫人の墓、直親の美子虎松 後の直政の墓である。直親の墓が元許嫁の直虎の墓と実夫人の墓に挟まれているのが面白かつた。先人たちの計らいからか。この墓所の北側に宮内庁が管理している墓がある。後醍醐天皇の

皇子 宗良（むねよし）親王の墓であり、東側の表へ行くと明治5年の造営された井伊谷宮になっている。どっちからでも 参られるようになっていたのだ。この宗良親王が井伊谷に来たことは後で触れる。

同行した仲間一人早く帰りたいと言ふので、高台にある「国民宿舍 奥浜名湖」で早い目の昼食をとった。そこからの眺望がすばらしく、眼下に浜名湖に通ずる都田川があり、気賀の辺りで井伊谷川が合流しているのが良くわかる。

遠江国 井伊谷は遠い昔「井の国」と呼ばれ、清らかな水が湧き出る美し山間地であつた。龍潭寺に近い田地の中にその湧き出



る井戸があり、後の初代共保になる赤子が官司により井戸にて発見され育てられ、地元で聡明な評判になっていたのを、藤原北家の流れをくむ遠江国司藤原共資が跡取りが居なかつた故、共保と名付け娘婿として家を相続させた。寛仁元年(1011)頃の話である。やがて共保は生誕の地である井伊谷に井伊谷城(三岳城)を築いて移り込み、家名も藤原から井伊と改めた。井伊家の始祖になる。「井より出生する故、井桁を持つて旗幕の紋とし、井の傍らに橘の一類あり、橘を衣類の紋とす」と定めた。定紋を橘紋で替紋が井桁紋になった。

足利尊氏が光明天皇を即位させ北朝を、後醍醐天皇は南朝を打ち立て、ここに南北朝時代が始まる。後醍醐天皇は多くの皇子達を全国に派遣し、勢力の拡大を図った。その一人が先にご紹介した宗良(むねよし)親王で、南朝方のの莊園「氣賀庄」にある井伊谷に入り、井伊家の助けを借りて南朝方の勢力拡大を目論んだ。これを阻止しようとする足利尊氏は足利一族の今川範国(のりくに)を遠江国守護職として送り込んだ。

建武4年(1328)今川範国は井伊谷を攻込み、12代井伊道政は三方ヶ原で迎え打ったが、三岳城に籠城し持ちこたえ、今川軍は軍を引いた。これがその後幾

も心を砕いた。

浜名湖の周辺には今川家の重臣達が城を持つていた。例えば戦いに優れていた大沢家は今の館山寺温泉である堀江城を持つていた。気賀にも城を造れと今川家から指示があるが、龍雲丸と言うドラマオリジナルのキャラクターに「城は要らない。城があれば攻めこまれる」と言いながら、満潮時には船がなければ攻込まれない城を海拔1mの城を造り始める。直虎も賛成するが、。碑があるだけなので、先の「国民宿舎 奥浜名湖」の台から見えなかった。

永禄11年(1568)。武田信玄は駿河攻略を目指し、信玄はいとも簡単に駿府を手中に収めた。呼応するかのようには徳川家康も、遠江に攻込み、形勢を不利と見た井伊谷三人衆が家康の陣を訪ね、井伊谷城の無血開城を進行し、直虎も許順の意を表した。しかし、今川側にいた堀川城の周辺の住民は堀川城に籠城し、抵抗を続けた。翌年、やむなく家康は城を攻込み、気賀の住民も含めて1700名を皆殺しにしたと言う。龍雲丸の心配していた通りになったが、家康が時間がかかったと言うことは、確かに龍雲丸が言った通り攻め難い城だった。この戦いに参加した大久保彦左衛門は「三河

度となく続く井伊家と今川家の戦いの始まりだった。わずか3年後、三岳城の上に大平城まで今川家に攻略され、親王は信濃に逃げ、井伊家は北朝方に屈服する。応安3年(1568)九州探題今川了俊の命により、南朝掃討のため井伊一族九州へ出兵、以降2年に及ぶ長期戦により多くの家臣を失い、経済的損失拡大した。

永正7年(1510)代城主井伊直平(直虎の曾祖父)今川氏からの従属を脱却するため何回も戦い(永正の乱)を挑むが、結局26年後天文5年(1536)の9代当主今川義元の懐柔策により井伊谷城、井伊家に変換されるも、直平の娘人質として送られた。その後も今川の指示により戦いに駆り出され、特に桶狭間の戦いで、また、今川から派遣された家老職小野一派により当主初め家臣も多く失った。小野一派影響を避ける隠棲先から戻って来た次期井伊家当主直親さえも、徳川方に近づいた疑いで討たれ、しかもその1年後直平も今川家の指示により毒殺された。ここに井伊家一門の男子は直親の遺児、虎松しか残っていない。永禄8年(1563)出家していた次郎法師は還俗し井伊家を相続し女城主直虎となった。今まで便宜上直虎と称していたがここで初めて直虎と名乗り、遺児虎松を次期城主と育てることに

物語」の中で「徳川勢による撫で斬り」と残している。龍譚寺の南溪和尚と直虎の母である祐椿尼が供養したと言う。永禄22年(1569)今川氏真が徳川家康に降伏し、230年間、駿河・遠江を支配した今川氏が滅亡した。

元龜3年(1572)井伊一族は遠江に侵攻してきた武田軍と仏坂の戦いなどで井伊谷城を明け渡すが、龍譚寺も焼失。家康、三方ヶ原にて信玄に大敗する。翌年早々井伊谷も放火される。信玄発病の為、帰国途中に。

天正3年(1575)虎松(直政)14歳の時、鷹狩途中の家康にお目見え。出仕を許され、3百石と「万千代」の名を賜り、井伊姓に戻るよう命じられる。これはそれ以前に、直虎が家康に井伊を守って欲しいとの依頼に対し、龍譚寺の南溪和尚を良く訪ねていた山伏の松下常慶の兄家康の家臣松下源太郎の後添えに虎松の実母を嫁がせた。要は母子共の人質である。直虎と南溪が考えた井伊家の安定の為であった。鷹狩の情報も常慶から聞いていたのである。その結果万千代(直政)は家康の家臣となって、天正10年(1583)元服し、井伊直政と名乗り家督を相続した。北条軍と戦いの功績により4石に増。家康から武田軍の武器を許された。その後も次々功績をあげ、徳川四天王のひとりとなる。